地域トピックス

「三河漆」の復興と新たな挑戦

西三河農林水産事務所

国内で漆器づくりなどに用いられる漆の約９割は中国など海外からの輸入で、漆の国内生産量は約 1.7 トン、その約８割が岩手県産です(令和４年特用林産物生産統計調査)。また、漆が採取できるようになるまでには、ウルシの苗を植樹してから約 15 年かかり、1 本の木から一生のうちに採れる漆の量はわずか約 200 グラムといわれています。

文化庁の方針で、2018 年度から国宝や重要文化財建造物の保存修理には原則として国産漆を使用することとなりましたが、保存修理には年間で約 2.2 トンの漆が必要だといわれており、国産漆の需要は高まっています。

１「岡崎漆プロジェクト」の取組

三河地方は、かつて三河漆の産地として有名でした。三河地方を代表する戦国武将家康公をはじめとした三河武士が身に着けていた甲冑などにも、漆が使われていました。その三河漆を復興するために、2021 年 11 月に、岡崎市をはじめ、地域、大学、研究機関、民間企業及び NPO 等が協力して「岡崎漆プロジェクト」を発足させ、2023 年には額田地区に約 3,000 本のウルシの苗が植えられました（写真１）。2024 年も継続して植樹を予定しています。

写真１ ウルシ苗の植樹

２「合同会社 ELEMUS（エレムス）」の取組

「岡崎漆プロジェクト」のメンバーである合同会社 ELEMUS は 2019 年に設立し、ウルシ苗の栽培、「サスティーモ®」（木粉と漆を原材料とする 100%バイオマス成形原料）の製造及びその「サスティーモ®」粉体（写真２）の成形製品の販売などを行っています。

写真２「サスティーモ®」粉体

合同会社 ELEMUS は、東京都立産業技術センターが約 20 年をかけて構築した「サスティーモ®」の特許技術を継承し、独自の製造方法で特許を取得しました。現在では、世界５ヵ国で特許を取得しており、「サスティーモ®」成形製品の輸出も視野に入れています。さらに、学校給食用の食器等への導入についても関係機関等と調整しており、近い将来には箸や食器に使われるかもしれません。

また、昨年、岡崎市のふるさと納税返礼品に大河ドラマ「どうする家康」ロゴライセンス品のぐい呑み（「サスティーモ®」の成形製品）が登録され（写真３）、大河ドラマの出演者にも贈呈し、PR しました。

写真３　ふるさと納税返礼品